琉球病院 Monthly

独立行政法人
国立病院機構　琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.120
2024. November

発行者　琉球病院事務部長
池間　忍

基本理念　この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

学会奨励賞受賞報告

琉球病院　精神科医師　**福森　崇之**

今年の６月に行われた第１２０回日本精神神経学会（札幌）で精神神経学雑誌投稿奨励賞を受賞したので報告します。演題は、「クロザピン誘発性流涎に対するソフピロニウム臭化物ゲルの前後比較試験」です。ややこしいタイトルですが、前任地のさいがた医療センター（新潟県上越市）で行った研究でクロザピン誘発性流涎の治療法に関するものです。

クロザピンは治療抵抗性統合失調症（複数の抗精神病薬を十分な量、期間使用しても症状が改善しない、または副作用のために服薬継続が難しい統合失調症の患者さん）に対して有効な治療薬で、一般的に治療反応率は部分改善も含めて60％程度とされます。この治療を行うことで、これまで長期に入院や行動制限を要した患者さんの症状が改善し、地域に退院していく姿を幾例も経験しました。一方で無顆粒球症をはじめとした一定の注意を要する副作用もあり、安全に治療を進めるために治療の導入は入院して行い、定期的に血液データ等をモニタリングします。「流涎（りゅうぜん）」は聞きなれない言葉かと思いますが、唾液が口から流れ出す現象のことで、クロザピンの内服当初に比較的よくみられる副作用です。多くの場合は軽症で、時間の経過とともに改善することも少なくありませんが、中には長期にわたって口腔内から涎が流れ出る人も少数ながらいます。今回の研究は、重度の流涎に対して有効な治療法を提供できていないことに課題を感じて行った研究発表でした。この研究を通してクロザピンという薬に対する理解が深まるばかりでなく、相談や議論などのプロセスの中で様々な人との繋がりも感じられる貴重な経験になりました。琉球病院では木田先生が中心となり、これまでクロザピン病棟で４００例以上の患者さんに治療を提供しています。私自身はまだそれほど多くの経験はありませんが、琉球病院でも諸先生方にご指導頂きながら、より良い医療を安全に提供できるように精進していきたいと思います。

地域医療連携室だより

精神保健福祉士　伊禮　有香里

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。

一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。

また、中北部圏域を中心とした地域の皆様により良い医療を提供し、適切な対応ができるよう心がけております。

新規相談に関しましては予約制のためお待たせする期間もありますが、入院治療など早期の受診が必要な場合は地域医療連携室までお問い合わせくださいますようよろしくお願い致します。

院　長

ふくじ　やすひで
福治　康秀

1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。
1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。
95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。
日本森田療法学会理事。
日本病院・地域精神医学会評議員。
琉球大学医学部　臨床教授。

診療科

- 一般精神科
- こども心療科
- クロザリル外来
- アルコール依存症等外来

病床数　353床

・精神（一般精神・クロザピン専門・精神科救急）	151床
・アルコール依存症	44床
・児童思春期ユニット	4床
・重症心身障がい	90床
・医療観察法	37床

那覇市からのアクセス

路線バス　那覇BS（下り）または名護BS（上り）より沖縄バス「77番名護東線」浜田バス停下車徒歩３分

自動車　那覇市から40分沖縄自動車道道金武インターから名護向け５分

お問い合わせ

時間　8:30 ～ 17:15（土・日・祝日・年末年始以外）
TEL　098-968-2133（代）
内線　231・234

地域医療連携室（直通）

TEL　098-968-3550
FAX　098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

精神科医長　木田　直也

クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者さんに対して、当院では 2010 年2月からクロザピン（CLZ）治療を開始し、登録症例数は延べ 424 例になりました。CLZ 導入前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために、隔離や身体拘束が必要な患者さんも多くいらっしゃいましたが、CLZ 継続例では問題行動も消失、もしくは軽減し、ほとんどの症例で隔離や身体拘束は解除できています。週に3回の CLZ 専門外来も行っていますので、患者さんのご紹介をお願いいたします。当院での CLZ 治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル / クロザリル適正使用の流れ (https://www.drs - net.novartis.co.jp/dr/products/product/clozaril/point/) でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

精神科急性期病棟紹介

東Ⅰ病棟師長　竹島　銀治

当病棟は、平成３１年４月からスーパー救急病棟として運営しています。入院患者さんは精神科急性期特有の陽性症状や著明な陰性症状を呈しているため、リスク管理を中心とした精神科治療が優先され、時に患者さんの安全を守るための行動制限やセルフケア援助を中心とした手厚いケアを必要とします。また、3ヵ月以内での退院を目指し日々、精神症状や人格特性への理解、観察力や状況判断、リスクアセスメント能力、コミュニケーション能力等、多職種と連携し医療を提供することが求められます。

当病棟の使命は、病院理念「この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である」とあるように患者さんに寄り添い、早期から効果的な治療を提供することで、精神症状からの回復を支援し、社会復帰を促進していくことです。これからも患者さんに寄り添い、多くの患者さんの回復を支援していきます。

強度行動障がいを伴う発達障害チーム医療研修へ参加して

西Ⅰ病棟看護師　石川　修・新城　康人

令和６年９月２６日～２７日の２日間、肥前精神医療センター主催の「強度行動障がいを伴う発達障害チーム医療研修」に参加してきました。講義では、強度行動障がいを持つ方の看護や療育・リハビリテーションなど各医療職の役割について学ぶことができました。グループワークでは、医師・歯科医師・心理士・作業療法士・保育士など多職種も参加し「望ましい行動の強化を目指した支援」について、ストラテジーシートを活用し意見交換を行いました。不適切な行動を防ぐ接し方や関わり方など、多職種の成功体験やそれぞれの専門的な視点から意見を聞くことができ、今後活用できる手法を学ぶことができました。また、強度行動障がいをもつ家族の講演では、「なんで、あの時、そう接してしまったのだろう。世の中の当たり前を押し付けて、この子の当たり前を理解してあげることができなかったのだろう」という言葉があり心に響きました。今後、利用者の訴えや行動に対し、もっと理解できるよう努力し「困った行動を無くすための介入」より、「良い行動を褒める介入」を第一に考え、入所者個々が生活しやすい環境を整えていきたいと思います。

重症心身障がい部門

療育指導室長　金城　安樹

令和６年度障害福祉サービス報酬改定において、障害者の意思決定支援を推進するための方策があげられています。個別支援会議の利用者参加においては本人の支援を検討するにあたって、本人が希望する生活及びサービスに対する意向等を改めて確認することが重要となります。本人による発言が困難な状態の場合であっても、本人の状態を直接確認することで、意思と選好を行うべきと示されています。当院においても本人の状態が悪化することが見込まれる場合を除いて、個別支援会議の利用者参加をすすめています。重度の障害により本人の自己決定や意思確認が困難な場合も多いですが、関係者が集い様々な情報を把握する事で、根拠を明確にしながら適切に利用者への意思決定支援が行われるよう努めてまいります。

こども心療科

心理療法士　我喜屋　良行

琉球病院では県から「子どもの心の診療ネットワーク事業」の委託を受け、医療機関や他機関とのネットワークの構築、人材育成などの取り組みを行っております。その一環として、こども心療科でも、県内の医療従事者を対象とした実地研修の受け入れを行っており、診療陪席や研修等を通して、こども心療科で行っている診療の実際やノウハウをお伝えしています。昨年度は、３医療機関から６名（医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、臨床心理士 / 公認心理師など）の参加があり、今年度もすでに何名かの方に研修、問い合わせをいただいております。

研修後のアンケートでは満足したという声をいただけており、私どもの励みになっているのと同時に、私たちにとっても日頃の診療の在り方を振り返る機会になったり、他院のお話をうかがうことで学びにつながっています。研修終了後も情報交換をさせていただくこともあり、今後もこのような支援者同士のつながりが県内に広がっていけばと願っています。